



水戸農学校生の兵営宿泊 (水戸市, 昭和11年)
〔写真記録茨城20世紀〕より転載)

土浦中学の学校教練 2 ～兵営宿泊訓練～
1909(明治42)年3月に歩兵第二聯隊が水戸に移転すると、土浦中学では、早速、同年9月に全校生徒が水戸歩兵第二聯隊の兵営参観を行っている。そして、1915(大正4)年4月には聯隊で、発火演習と兵営宿泊とを実施している。更に1930(昭和5)年からは2泊3日の兵営宿泊訓練が実施されるようになり、4年生全員が参加している。
文中の【 】内は筆者による注記である。

歩兵第二聯隊

歩兵第二聯隊(連隊)は、大日本帝国陸軍の聯隊の一つで、1874(明治7)年に栃木県宇都宮に置かれたが、1884年に千葉県佐倉に移転、日清・日露戦争に従軍した。1909(明治42)年、茨城県や水戸市の官民挙げての誘致運動により、水戸【水戸市郊外の東茨城郡常磐村・渡里村に跨る山林原野・耕地・宅地など20万坪に及ぶ土地が軍用地となった】に移転し、茨城県の「郷土の部隊」となった。

1919(大正8)年、シベリア出兵のためハバロフスクに上陸、翌年のニコラエフスク(尼港)事件では第二大隊が全滅した。1931(昭和6)年、上海事変が勃発すると、翌年、上海に上陸。その後、満州に駐留し、1933年の熱河作戦などに従軍した。そして、1934年、水戸に帰還した。1937年、日中戦争が勃発すると塘沽に上陸、山西作戦・徐州会戦などに参加し、1939年に水戸へ帰還したが、翌1940年、軍備改編のため満州に永久駐屯となった。しかし、アジア太平洋戦争の戦局悪化による部隊の南方転用により、1944(昭和19)年4月、パラオ諸島ペリリュー島の守備に就いた。同年9月、米軍が上陸、激戦の末、

11月24日、決別電報を発信し、部隊は玉砕した。郷土の部隊であった第二聯隊には茨城県出身者が多く、土浦市大手町の東光寺の過去帳にも、本校の卒業生も含めて、ペリリュー島で戦死した将兵の戒名が並んでいる。

兵営宿泊訓練

最初の兵営宿泊訓練は、1930(昭和5)年10月2日から4日にかけて水戸第二聯隊で行われた。その訓練の内容を『進

修第33号』(1931年4月1日発行)の記録から辿ってみる。

10月2日

配属将校の渥美教官と市毛・倉地・永山の3先生との引率の下に、土浦中学4年生116名(中31回)は、午前10時、水戸第二聯隊に到着した。営門を入ると矢叫びのような敬礼の声に生徒たちはびっくりに、赤塚駅からの行軍の疲れも吹き飛んだ。小休止後、渥美教官の案内で兵営内の建物を見学し、洗濯場・炊事場の規模の大きさに目を見張り、更に機関銃・拳銃・鉄兜・歩兵砲・毒ガス防御用の兵器などをも見学した。齋藤静夫は「兵營見學」の中で、可愛らしい軍用伝書鳩に「小さい無智な鳥でありながら、人力を超越して良く各自の使命を全うするとは鳩の力誠に偉大なるかな。」と感心している。

田中静老聯隊長の講話の後、持参の弁当で昼食。1時間の休憩の後、各々宿舎となる兵営室に入ると、付添の兵卒によって各自の寝所が指定され、そこには細長いズツクの藁布団と袋状の毛布、枕が用意されていた。兵卒の指導で自分のベッドを整えると、アルミニウムの食器が渡され、いよいよ兵営生活が始まった。その後は特にする事もなく、部屋の掃除や身の回りの整理を行った後、夕食になった。その夕食から消灯までの様子を塚原茂男は、「兵營宿泊の記」の中で次のように記している。

「我々の中から数名の食事當番が炊事場に行つて御飯を持つて来た。麥の澤山入つた眞黒い御飯だ。吸物の方は大きなバケツに一杯、それに鹽漬けの魚と、香の物と、これが晩の御馳走である。それを兵隊が一々分けて呉れた。それから皆

一齊に食卓について食べ始めた。軍隊の御飯は生れて此方これが初めてである。まづいものだらうと思つたが案外旨かつた。食事が済めば銘々自分の食器を洗ふのである。家であるならお母さんにも洗つて貰ふ所だらうが軍隊にあつてはそんな我儘なことは絶対に出来ない。萬事自分でしなければならぬ。

食後は酒保【兵営内や軍艦内で、日用品・飲食物などを扱う売店】に行くことを許されてある。酒保は軍隊に於ては唯一の娯樂場である。従つて食物其他の日用品などの安價なものには驚く。餘り安いので皆食ふは食ふは今御飯を食べたばかりであるのにあつちでもこつちでも盛んに口を働かして居る。八時半には人員點呼がある。ラツパの合圖で皆床の前に整列して人員を調べる。九時になると消燈ラツパが鳴り皆寝につくのである。我々も皆袋の様な毛布の中に潜り込んだ。皆珍らしいので仲々眠れさうもない。盛んに無駄話をして居る。が間もなく晝間の疲れでぐつすり眠つてしまつた。かくして我等は兵營生活第一夜の安らかな夢路に入つたのである。」

10月3日

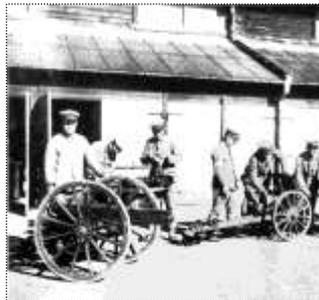
6時、起床ラツパ。洗面に向かうと、既に兵隊さんたちは試合に備えて銃剣術の猛練習中。食事ラツパで當番が飯を運び、1班40人が昨晚同様一つのテーブルで、麦飯と味噌汁で朝の腹搾えを済ませる。

雨模様の中、機関銃中隊の行軍と演習を見学。中隊長の命令一下、数十名の下士官・兵卒による重機関銃や歩兵砲の組立・分解の機敏さには眼が覚めるよう。同じく中31回の中村敏行は、「我が第二聯隊の精銳機關銃隊の作業は實に目覺

しかつた。號令一度秋晴の空の奥まで響き渡れば馬背の鐵片は地上の武器、次の瞬間には彈丸銃身一本を馬に積むにも數名の一致協力が事を迅速にはこぼれ、と、その行動の速さと正確さに驚いている。



水戸市新原に建つ「尼港殉難者記念碑」(右)。第二連隊における兵器の手入れ(水戸市、昭和初期)(下、『写真記録茨城20世紀』より転載)



その後、電話敷設訓練やモールス信号の練習をし、幹部候補生の合同体操を見学したが、雨脚が強まったために、講堂内で活動写真(映画)を鑑賞することに なった。同じく小倉誠治は「朝ぼらから活動寫眞見物とは、随分暢氣な軍人ではある。」と漏らしている。

午後には天候が回復し、第二聯隊の將校が見守る中、土中生の教練が行われた。その緊張の様子を小倉誠治は、「午後二時、私達に言はしむれば銃の受領式である。油を拭いてそつと肩に載せてみる。言ひ知れぬ快感が心に溢れた。」

助教、助手、軍人の號令で、日頃の練習をこの本舞臺で飾る晴の日である。誰しも緊張せざるを得ないであらう。各個教練より、愈々本物の中隊教練に入った。

百有三十の進修健兒よ。しつかりやれ。後指を指される様なへまはやるな。渥美教官の號令が秋空高くこだました。

手が動いた。擔筒をした。足が前に出た。私達はもう夢中である。唯、機械的に、無意識の中にどの位前進しただらうか。「中隊止め」の號令は初めて私達をして夢から覺ましめたのであつた。「うまい」後の方で軍人がこう叫んだ。又渥美教官の言葉、私達の満足はこゝに絶頂に達したのであつた。私達は遂に克ち得た。後指をさゝれる様な苦手はしななんだ。私は涙ぐましい程うれしくなつて来た。「や、皆、よかつたなあ」と。

秋の日もなれば、担当の班長さんも、人の好きそうな日に焼けた顔をして面白い話をしてくれ、酒保では安い果物や菓子の味を貪りながら、昼の疲れを忘れて兵卒の打ち解けた話に打ち興じた(予定されていた夜間演習は、天候不良のため実施されなかつた)。

10月4日

朝食の際に昼食用のパンも渡され、第3日はいよいよ実弾射撃。銃の配当を受けて、元氣一杯射撃場に向かう。杉林と畑に挟まれた小径を数丁「丁」町とも書く。尺貫法という距離の単位。1丁は60間、約109m強】進むと、眼前にピラミッドを思わせるような遮蔽用の土手が突然現れる。四方に土手を繞らし、的を置く正面の土手が最も高くなっている。土手と土手との間を通つて射撃場内に入る。

まず、渥美教官が小銃と輕機関銃の模範射撃。全弾が標的を打ち抜く。生徒たちは「凄いな!」と口々に叫んでいる。次

いで生徒たちが5名ずつ兵卒に引率されて射場に入つて行く。いよいよ実弾射撃が始まるのである。兵卒から実弾5発が手渡され、急いで弾倉に込める。200mの伏射を行う。同じく矢口孝志は「實彈を孕ませた銃をぎゅつと握つて、遙か向ふの的を打つのだ! 引金へ指先の、末端神経がびり、と振へる! 夫がじつと靜まると突如! 轟然と火と煙を吐く銃口! ぐんと来る肩の反動! 忘れ得ない瞬間ではあつた。」と、「兵營生活所感」で述べている。

射撃をすると轟然たる音響が向こうの土手からはね返つて来る。それと同時に強い反動が肩を押し、姿勢が僅かに崩れる。5発を打ち終えようと、得点を言い合う声が聞こえてきた。射撃は進んで最後の生徒となり、38点の最高点を取つた。それに続いて先生方も銃を執られたが、市毛先生は8点、他の2先生は0点だった。

かくて生徒たちが待ちに待つた実弾射撃は終わりを告げ、銃を返納した後、赤塚駅へ向かい帰路に就いた。

初めての兵營宿泊訓練は、生徒たちに強い印象を与えた。鶴町朝次は「一旦緩急の場合に際し、身を捨て、命を惜まず出征の途に上るあの勇敢な軍に對し、責任と地位とをよくわきまいて之に奉仕せねばならぬことを自覺した。」と、中学生としての銃後の務めを強調し、齋藤静夫は「軍人の目的は何であるか。曰く、自國の保護、即戰爭を行ふにあり。それには勇敢なる軍人と精巧なる兵器が必要である。たとへ前者を有しても後者を有せざれば戦に勝つ事は不可能であり、又後者のみを有して、前者を有せざれば戦に勝つ事は出来まい。要するに敏捷に

して勇壯なる軍人と、世界に無比なる精銳な武器がなくてはならぬ。

世人は叫ぶ、平和平和と。然し平和は無いのである。必ずや今後再び戰爭は勃發するであらう。我が國に於ても然り。而して一度戰端を交へた以上、國家の名譽、興隆の爲に斷然勝たねばならぬ。

兵營生活を行ふに當り自分は益々その高潮するを覺え我等第二の國民の任務の如何に重大なるかを強く心中深く感じた。」と述べて、將來戰爭が避けられないことを予見して、中学生の責務の重さを強調している。

その後、兵營宿泊訓練は4年生全員が参加して毎年10月に実施され、1936(昭和11)年まで続いた。軍では將來の幹部候補生たる中学生に軍事訓練に親しませ、軍への拒否反応を輕減させるために、訓練を受け入れていたようである。いわば運動部の体験入部(入部が確定するまでは優しく接することが多い)のような扱いをしていたのである。そのため1934(昭和9)年の訓練に参加した中島誠(中35回)が、「兵營生活」(『進修第38号』1935年2月20日発行)で、「中學生活の五ヶ年間の我等にとつて最も樂しがるべきは【5年次の】關西旅行と【4年次の】兵營生活である。―勿論後者は遠足、旅行等と同一視することは出来ないが。―一日千秋の思ひであつた兵營宿泊なるものが愈々實現される事になつて懐しい校門を後にした時の嬉しさ、樂しさは、何とも言ひやうのない程であつた。」と述べているように、兵營宿泊訓練は、緊張は強いられるものの、土中生にとつては待ち焦がれる行事となつていたのである。

参考文献 『進修第33・38号』